



川原 秀仁

山下ピート・エム・コンサルタンツ社長

BIM (Building Information Modeling)

が、国内の建設産業に急速に浸透し始めている。この1年で加速度が増した感がある。ちょうどバブル以降にCADが普及していった状況と酷似している。あるいはEMAILの普及の仕方もそつだつた。だからそれほど時間を使わずに、ほとんどの建設プロジェクトでBIMを用いる時代が訪れる」とだろう。しかし、そのインパクトはCADなどの比ではない、とてもなく巨大な可能性を秘めている。

現在、BIMはジジニアライジング(3次元可視化)・各種解析シミュレーション・工種間干渉チェックの大い／＼3つの要素で多大な

に役立っている。

とはいっても、現在のこの状況のままで、発注者が自らお金を出してでも欲しいアイテムになっているか

BIMのとてつもなく巨大な可能性

効果を發揮している。計画の段階で多角的な方面から仮想現実を体験できるので、発注者(事業者)が建築の専門的な難しい課題に直面し決断を迫られる際に、その決断を促しやすく、さらに迅速化するに大いに

と言われば、残念ながらそこまでには達していない。発注者からしてみれば、建物を新築する時だけ一時的に必要な専門ツールに過ぎないからである。建物の引渡しを受けて発注者が実際に建物を運営する段階になつて、建物の運営(Property)管理と資産(Asset)管理に向けて有効に活用できるようなものでない

には資産形成の単位となる工事費内訳書の細目といふひとたまりの単体として変換されオブジェクト化された3Dユニットとが相対連動して、中央監視システムや財務管理システムとも連携することにより、簡単に操作できるようにならなければならぬ。あわせて施設運営管理者が容易に扱うことができるか、あるいは

けになつて、事態は劇的に促進されることになる。たとえば、IFRS(国際会計基準)におけるコンボートを握つて、ぜひ建築業界からの技術と制度構築によって実現させたいものだ。その先には途方もない可能性が拓がり、BIMクラウドと表現してもいいようだ。ICT(情報通信技術)が向おうとしているのと同様の世界が生まれるかもしれない。このように、道のりはとても長いように感じられるかもしれない。事実、公共機関のBIM採用もまだ足踏み状態にある。

しかしながら、便利で合理的な世界へと進化していくのが世の常というものであるとなる必要がある。そして、とても必要とされている技術なのである。だから、近い将来に誰かが必ず創り出すはずである。そのキヤスティングポートを握つて、ぜひ建築業界からの技術と制度構築によって実現させたいものだ。その先には途方もない可能性が拓がり、BIMクラウドと表現してもいいようだ。ICT(情報通信技術)が向おうとしているのと同様の世界が生まれるかもしれない。このように、道のりはとても長いように感じられるかもしれない。事実、公共機関のBIM採用もまだ足踏み状態にある。

は、建築技術だけではない経営・財務・法務・不動産などの他の深い専門技術が縦横無尽に絡みあうために、全体としてこの統合技術を構築していく主体者が不在であるためでもある。この分野をカバーする学問も確立されていないし、大学に講座があるわけでもない。ましてや各業界間の用語や費目の統一が図られていないわけでもない。それで今、とても必要とされている技術なのである。

だから、近い将来に誰かが必ず創り出すはずである。そのキヤスティングポートを握つて、ぜひ建築業

界からの技術と制度構築によって実現させたいものだ。その先には途方もない可能性が拓がり、BIMクラウドと表現してもいいようだ。ICT(情報通信技術)が向おうとしているのと同様の世界が生まれるかもしれない。このように、道のりはとても長いように感じられるかもしれない。事実、公共機関のBIM採用もまだ足踏み状態にある。

しかしながら、便利で合理的な世界へと進化していくのが世の常というものであるとなる必要がある。そして、とても必要とされている技術なのである。だから、近い将来に誰かが必ず創り出すはずである。そのキヤスティングポートを握つて、ぜひ建築業界からの技術と制度構築によって実現させたいものだ。その先には途方もない可能性が拓がり、BIMクラウドと表現してもいいようだ。ICT(情報通信技術)が向おうとしているのと同様の世界が生まれるかもしれない。このように、道のりはとても長いように感じられるかもしれない。事実、公共機関のBIM採用もまだ足踏み状態にある。

は、建築技術だけではない経営・財務・法務・不動産などの他の深い専門技術が縦横無尽に絡みあうために、全体としてこの統合技術を構築していく主体者が不在であるためでもある。この分野をカバーする学問も確立されていないし、大学に講座があるわけでもない。ましてや各業界間の用語や費目の統一が図られていないわけでもない。それで今、とても必要とされている技術なのである。

だから、近い将来に誰かが必ず創り出すはずである。そのキヤスティングポートを握つて、ぜひ建築業界からの技術と制度構築によって実現させたいものだ。その先には途方もない可能性が拓がり、BIMクラウドと表現してもいいようだ。ICT(情報通信技術)が向おうとしているのと同様の世界が生まれるかもしれない。このように、道のりはとても長いように感じられるかもしれない。事実、公共機関のBIM採用もまだ足踏み状態にある。

所論
諸論